

図書新聞の書評『「家族」はどこへいく』2007年、青弓社。

<http://www.toshoshimbun.com/BackNumberPages2/2869.html>

一見すると入門書，よく読むと専門書

鹿児島大学 片桐資津子

本書の「はじめに」において「家族論の格好の入門書」になったのではないかと書かれている。たしかに文体や表現は平易であるし，市民向け講演会の記録を平易な表現を維持したまま単行本にしたため，入門書のように読みやすい。しかし，その内容は歴とした専門書レベルである。専門家 5 人が各自の学問知を駆使して，挑戦的かつ意欲的にまとめており，実に読み応えのある一冊に仕上がっている。

以下，各章を簡単に紹介したい。第一章では，沢山美果子氏が「家族の歴史を読み解く」として，近世以降の家族史的アプローチから，近世と近現代を比較し，現代社会における子育て，捨て子，母子心中，父親と子どもの関係性を明らかにしている。近世の出産観や近代の女性史研究にも目配りして，三歳児神話や母性愛の形成過程，近代家族規範と父親による育児の関係性など，時事問題と絡めながら読み解いている。昔の家族は貧しいなかでも素晴らしかったという具合に，単純に美化するのではなく，家族史的視点で現代社会における家族病理と言われているものをとらえ直す作業によって，新たに見えてくるものがある。家族史研究の醍醐味を十分に堪能できる章である。

第二章では，岩上真珠氏が「戦後日本の家族はどう変わったか」というテーマを設定し，家族変動論的アプローチによって，戦後日本の家族，すなわち，近代家族から現代家族までの家族変動を描いている。とりわけ，20 世紀の大きな社会変動のなかで，女性の社会進出と結婚観・人生観に焦点を当てて，様々なデータを活用しながら，「変わる女性と変わらない男性」という社会的事実を描写している。これからの家族像として「個人化する家族」が挙げられており，「個人が主体的に選べる」ようになるということは，「家族がどうしてもいい存在になった」のではなく，「自分らしい家族のあり方を探求」できることを意味すると説得的に指摘されている。20 世紀の家族変動から社会変動までを，時系列的にかつ包括的に理解するために知的刺激が触発される章になっている。

第三章は，立山徳子氏の「都市・家族・ネットワーク」である。産業構造の変化といったマクロ分析と個人的体験としての家族のミクロ分析，これら双方の分析に目配りしつつ，都市家族の特徴を把握するために社会地図の手法を用いている点が興味深い。社会地図の空間分布から，「郊外」には，「都心」や「村落」に比べて，相対的に核家族と専業主婦が多いことが明らかにされた。しかしながら産業構造の変化の波が，郊外の専業主婦を就労へと向かわせていく。地域や家族の生活問題解決のためのシャドウワークを担ってきた専業主婦によるネットワーク資源が減少していくという問題が発生する。将来的には，家族

を超えたネットワークが家族を支えていくという意味で、「家族の問題は社会の問題である」と結論づけられている。前章が時系列的に家族を説明しようとするのに対して、本章はネットワークとしての家族という空間的に家族を捉えた章になっている。

第四章は、赤川学氏による「人口減少社会と家族のゆくえ」という挑戦的な論考である。問題設定の出発点は、合計特殊出生率の減少を食い止めようとする主流派の少子化克服論ではなく、少子化容認論である。人口減少社会を不可避と認識し、「少子化を前提にした制度設計」の必要性を訴える。具体的には、「どういうライフスタイルを選択しても、損も得も」せず、「負担とか受益がある特定の層に集中することをやめにする」という制度設計を明快に提案している。「少子化はなぜ問題なのか」、「仕事と子育て（家庭）を両立すれば、子どもは増えるか」といった少子化問題の本質に迫るような問いを立て、少子化に関して流布している言説に対して、データや論理的思考からことごとく反証していく。読んでいて快感である。最終的には「人口減少社会の制度設計」を具体的に示して、「人口減少社会に必要なのは滅びの美学だ」という結論を示す。データを示しながら冷静に一般の言説を見事に反証していく。本章は社会学の面白みを、躍動感を持って味わえる章である。

最後を締めくくる第五章のテーマは、岩本通弥氏が民俗学的アプローチからメディア言説に迫る「都市化に伴う家族の変容」である。社会に流布するメディア言説の真偽を確かめずに受け入れてしまう現代メディア社会、そして民俗学の『遠野物語』における河童や座敷童子を半信半疑で信じてしまう前近代社会、この両者は認知的に同じであると捕捉する視点が斬新である。「家族問題に関する日本のメディア報道の多くが、統計数値やアンケートをむやみに多用化する傾向性」について言及し、メディア批判を展開する。さらには「現代家族は崩壊したのか」、「都市化によって日本の家族の実態がどう変容したのか」との問いを立てる。新聞記事を含めた諸データを分析・考察した結果、「戦後日本では家族内殺人のすべてが減少しているように、現実の家族は健全の方向にあり、むしろ家族自体を病理視するような家族言説のほうが不健全」であると岩本氏は結論づけている。民俗学を現代社会分析に応用した、読者に驚きと納得を与える章である。

いずれの章もたいへん意欲的なものに仕上がっている。本書は初心者だけでなく、ひろく異分野の中堅研究者や研究者以外の一般の人びとにとってもまた、現代家族の実態を知るのに適した良書であろう。感覚的もしくは感情的に捉えられやすい家族の問題性や病理性を分析対象にしてはいるが、それにとどまらず現代社会の特徴を客観的に描写している。「都市空間の中の家族像」が変化していく様子をフィルターにして、現代社会の特徴を浮き彫りにしていこうとする志向性——。本書は、一見すると入門書、よく読むと高度な専門書となっており、大変高く評価できる必読の文献といえよう。